

猿の一文銭・仁多郡奥出雲町大馬木

令和4年4月5日

収録・解説・酒井 董美

イラスト・福本 隆男



語り手 千原貞四郎さん
(明治21年生まれ)
収録・昭和47年8月2日

あらすじ

昔、おじいさんとおばあさんが猫を一匹飼っていた。それから、猿の一文銭を持っていて、その一文銭は筆筒に入れておけば着物が增えるし、米びつに入れておけば米が増える。財布に入れておけば、お金が増える重宝なものだった。

隣のばあさんがそれを聞いて、「少しのあいだ貸してくれえ」というので貸してやったら「なくなつた」と言つて返してくれない。それから、もうお米もなくなる。それで猫に「隣のばあさんが一文銭をだまして取つたから、おまえを養へなくなつた。どこへでも行け」と言つたら、猫が長い間考へていたが、隣の家へ行って、隣のネズミをくわへ、「このおばあさんが筆筒の中へ一文銭を入れちようけに、筆筒をかじつて、出して持つて来にやあ、おまえを食うてやる」と言つて放してやつた

ら、ネズミが、ガリガリ筆筒をかじり底に穴を開け、一文銭を出して、持つて来たので、それを猫がもらつて持つてもどつた。
それで猫もまた養つてもらつたげな。それで昔こつぽし。

解説

語り手の千原貞四郎さんは、同町八川の叶谷集落生まれ。昔話は生家の祖母のタメさんから、正月などにコタツに当たりながら帰化されたもどつたと話してこられた。

ところで、この話は「昔話の型」でいえば、「本格昔話」の「呪宝譚」の中に「犬と猫と指環」として出ているのが、これに当たる。関敬吾「日本昔話大成」で見てもよい。

一六五 犬と猫と指環(A T五六〇)

1、貧乏な男が蛇(猿・魚)を助ける。親蛇(親猿・竜宮の姫)に指環(玉・延命小槌・財布・杖・一文銭)をもらう。2、彼はそれによつて金持ちになる。妻をもらい、番頭をやとう。3、(a)女房(番頭)が指

環を盗んで逃げる。または(b)女房が怪しんで指環を売る。4、男はもとの貧乏になる。5、飼犬と猫が恩を感じ川を渡つて探しに行く。(a)猫が鼠をとらえて指環をとらせる。(b)猫が指環をくわえて犬の背につて渡る、途中で猫が魚をとらうとして指環を水中に落とす。(c)蟹、河童にとらせる。指環をのんだ魚を捕える。6、指環は再び所有者にかえる。(犬と猫は功名争いをしてそれ以来仲が悪くなる)。

この話では、裕福を招く力を持つのは「猿の一文銭」であつて、指環(指輪)ではない。そして、主人公の家にあつたその一文銭を隣のばあさんに盗られたところから話が始まつている。また、飼猫は出て来るものの、犬は登場しない。このように話の展開も「昔話の型」からはかなり離れた形になつている。

このように全国的に同じような話が伝えられているとはいつても、地方によつていろいろに変化しているところが、おもしろいと言えよう。

(元島根大学法文学部教授)